

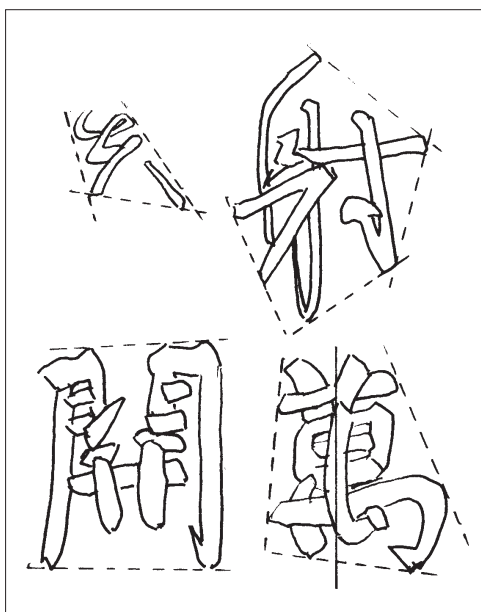
裴將軍詩・顔真卿

かんしんけい

第四回  
1、字句「射萬夫開

高橋香樹会長担当 半紙臨書課題

(12月22日締切) 出品料440円



2、形式「半紙タテ使用。右に「射萬」、左に「夫開」と臨書し、左余白に落款「○○臨」と書き入れる。

3、概観「季刊墨スペシャル第五号顔真卿」より書筵会元会長の平岡篤頼先生のインタビュー記事抜粋掲載の二回目です。

「バラエティをつくっていくのが芸術性の重要な要素。まして、顔真卿なんかは、ひどいというか無茶苦茶というか、「尺」という字を、上の部分をちゃんと書いて、払いをバーッと大きくしたり、「多宝塔碑」の「燈」なんかも、偏をものすごく小さく書いてる。この異様なアンバランスがみごとにバランスになっている。」



4、各字のポイント

射 筆線は軽やかなタッチで一気に運筆。「寸」の縦画は少し左傾。

萬 一転して肉太な筆線。下部の「口」は、中心より右側広く。

夫 小粒ながら運筆速度も速くなる。

開 楷書に近い文字になると、肉太な線となる。特に縦画はその傾向が強い。

一字書課題

(十二月二十二日締切)

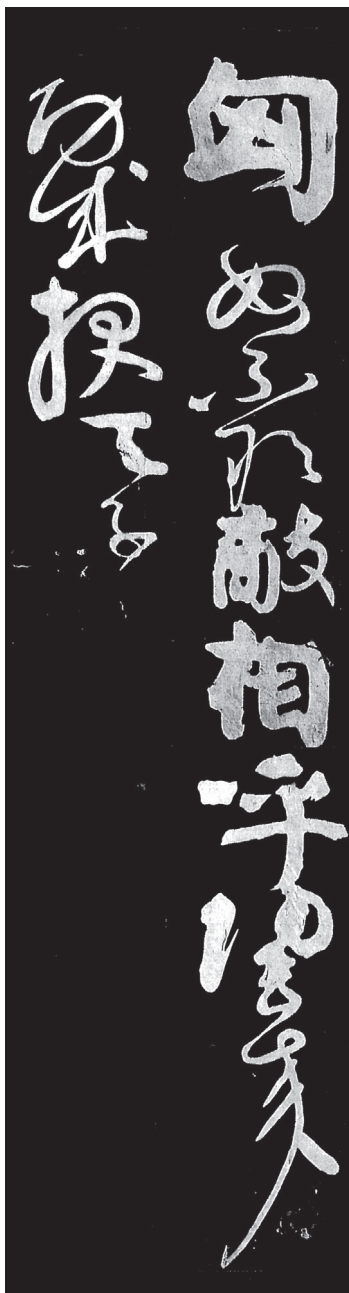
登

- (1) 書体自由 (2) 半紙タテ
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる

(4) 出品料 四四〇円

(5) パーコード券の余白に「一字書」と記入

条幅随意参考



匈奴不敢敵 相呼歸去來 功成報天子

(芸術新聞社)

※抜粋可。条幅は一枚目無料、二枚目から五五〇円。半紙随意部(無料)にも出せます。条幅部に出品する場合はパーコード券余白に「条臨」と記入。

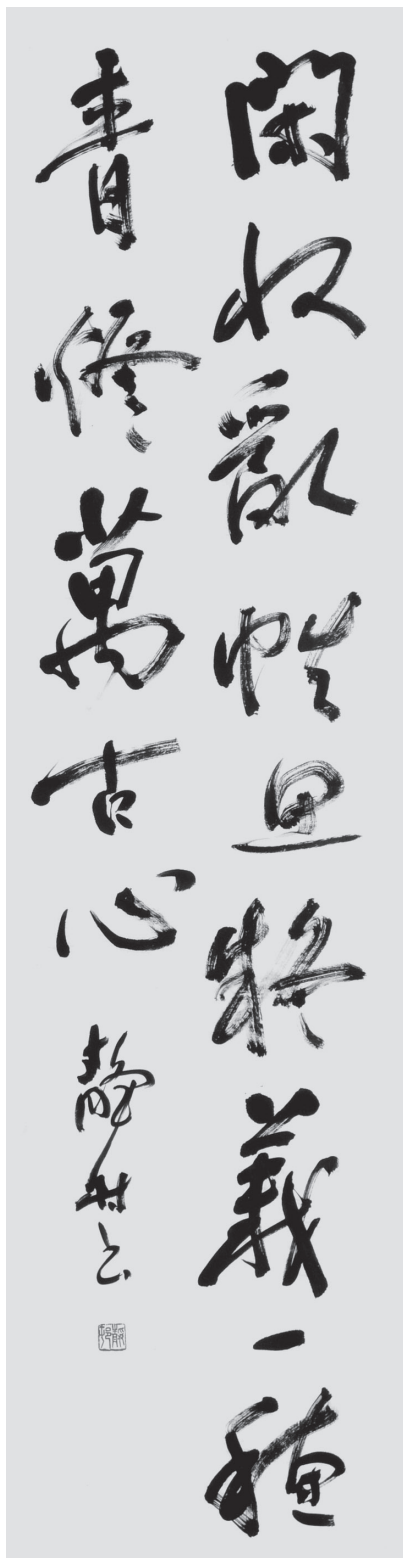
条幅部漢字課題参考

(十二月二十二日締切)

A

鈴木静村先生書

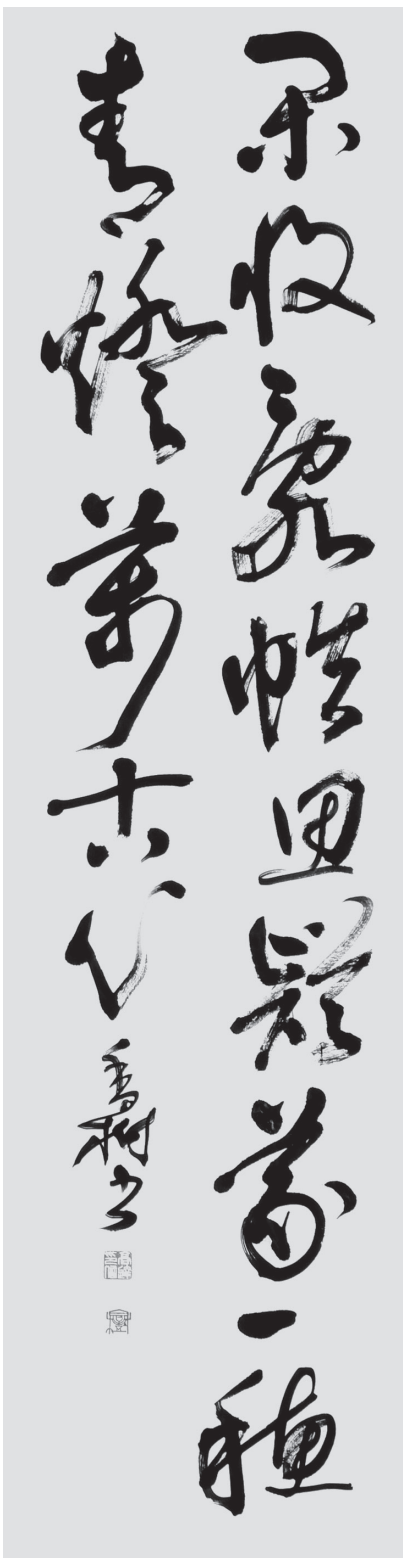
閑収亂帙思疑義 一穗青燈萬古心 (菅茶山)  
閑かに乱帙を収めて疑義を思う、一穗の青灯万古の心。



B

高橋香樹会长書

閑 門構え左右縦画に変化。収 末画は軽く抜く。亂 肩の書き方は三体で20種程、特に草書体が多い。帙 思 疑 渴筆部としての表出。見えるように書かない。必ず字典で調べ確認を。義 墨継ぎ。右辺の「戈法」は円滑に。一 サラッと。穗 燈 とも草書体。字典での確かめを。萬 墨継ぎ。下辺の腰を張り強く。古 横画は長めに軽く払い、「口」は小さく接筆に注意。心 一、三、四画の筆のつながりリズム的に。



今回は、草書単体の作としました。「収」は旧字体を「收」に作るため、こちらを採用した。「亂」も旧字体で。連綿線を使用しないので、上の字の収画から次字への一画目への繋がりを意識した運筆を。左右の文字が横に並ばないように。墨継ぎは「義・萬」。

訳：静かにとり散らした書物を整理しながら疑問点について思いめぐらすと、稲穂の形をした青白い灯火が古代の聖賢の心を照らし出す。

予告 (一月二十二日締切)

烏鶴定占誰屋喜

鱸魚知比去年肥 (戴表元)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
- ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み( )に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

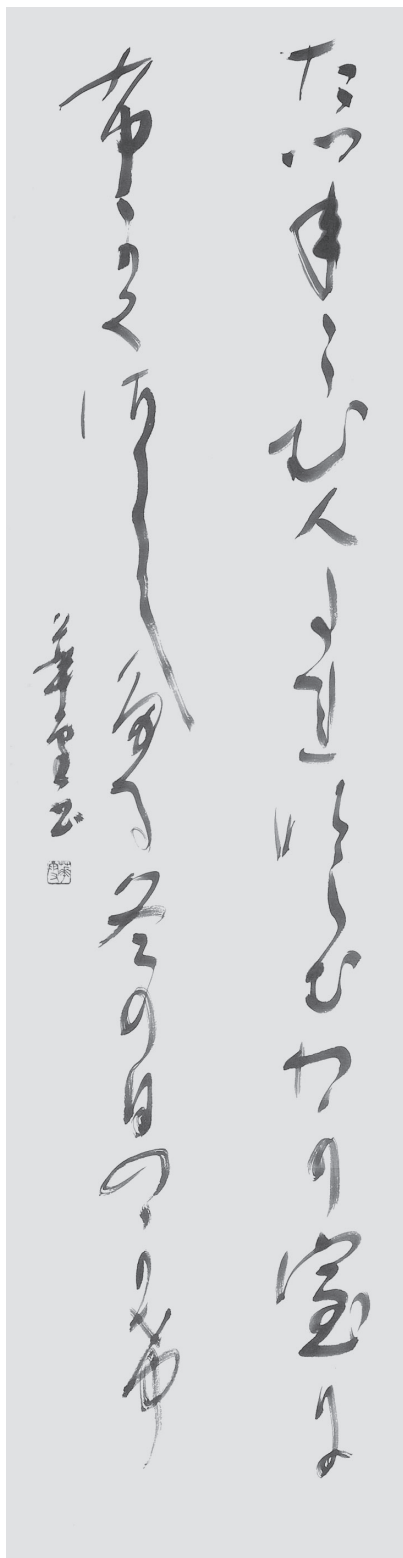
# 条幅部かな課題参考

(十二月二十二日締切)

A

平岡華雪先生書

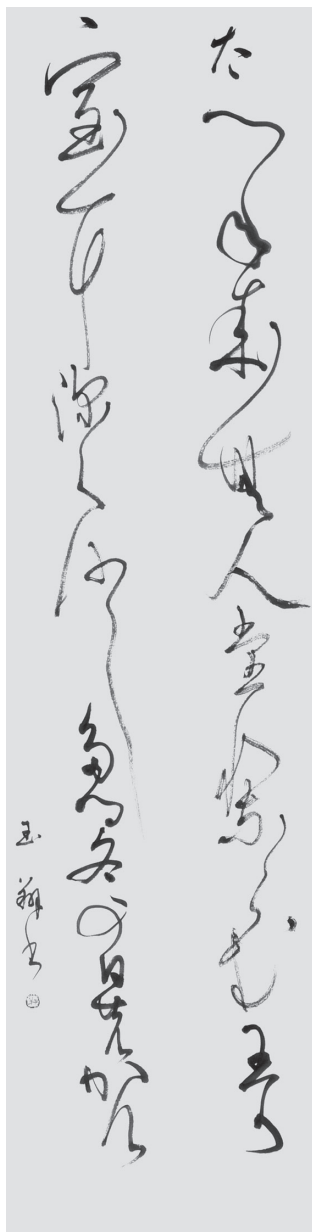
たづね來む人たれならむわが室に深くさしたる冬の日のかげ (古泉千樫)  
た川年こむ人多連那らむわ可室尔布可久佐し多る冬の日のかげ



B

福田玉翔先生書

たつ年來無人堂れ奈らむ王可室耳深久沙し多る冬の日農か介



古泉千樫

(一八八八〜一九二七)

千葉県生まれ。明治・大

正時代の歌人。

伊藤左千夫の門下となり、

『アララギ』発刊以後は

同門斎藤茂吉とともに実

質的な推進力となった。

一九二四年同誌を離れ翌々

年青垣会を結成。自選歌

集『川のはとり』のほか

没後刊行の歌集『屋上の

土』『青牛集』などがあ

る。

## 学び方

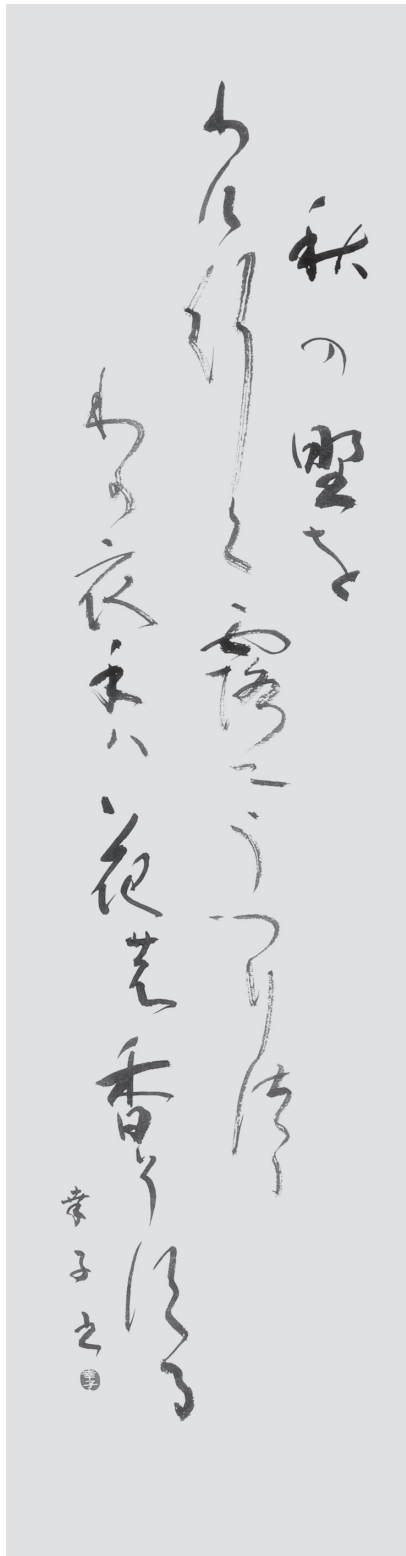
今回は、半切二行書きの後半を少し変形させ、「し」を伸ばした横に添うように重ねて最終行を入れました。一行目の下部で墨継ぎをし、二行目の「し」を華やかに伸ばす工夫です。半切作品は墨継ぎの位置を工夫することで印象が変わります。墨の濃淡の美しさを如何に表現するか研究してみてください。

予告 (二月二十二日締切)

梅が枝になきてうつるふ鶯の羽根しろたへにあは雪ぞふる (新古今和歌集 読入しらず)

- ◆注意
  - ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
  - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条かを○で囲み( )に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

# 条幅部随意参考（創作部門最優秀作品）



恵苑 清水幸子

秋の野を分け行く露にうっとりつわが衣手は花の香ぞする（新古今和歌集 凡河内躬恒）  
 秋の野をわ介行久露二うっとり徒々わ可衣手八花農香曾須る

訳：色づいて玉のように美しい木々に西風がそよぎ、枕やかむしろにも冷やかな秋の気配が感じられるようになった。楚の国の雲や湘江の流れに、昔の仲間を思い起こす。

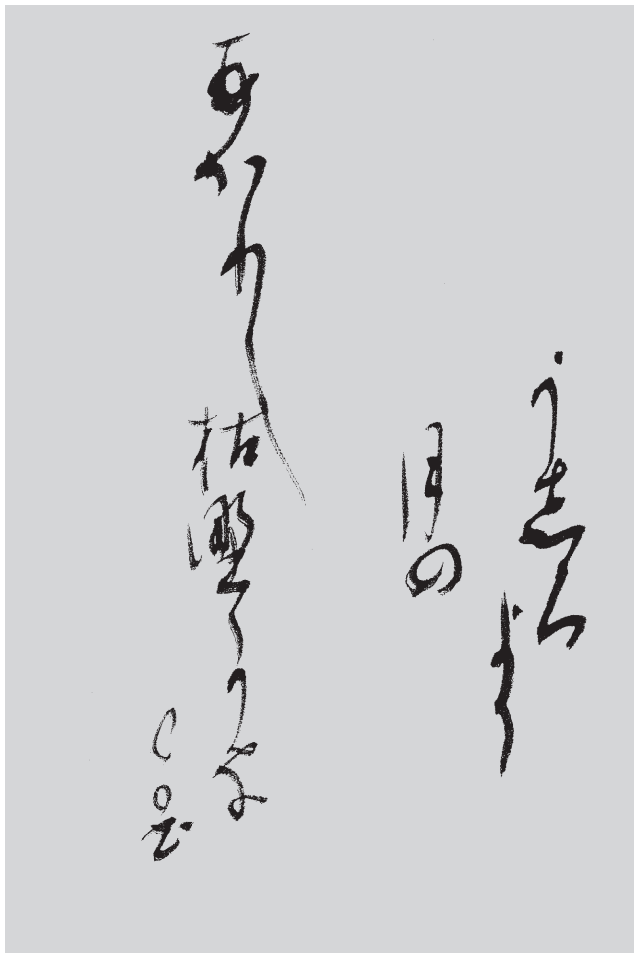


和楽備 中澤香林

琪樹西風枕簟秋 楚雲湘水憶同遊（許渾）  
 琪樹の西風枕簟の秋、楚雲湘水同遊を憶う。

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条随を○で囲み（1）と記入する。）
  - ・二枚目からの出品（バーコード券の条随を○で囲み（ ）に何枚目か数字を記入する。出品料550円）
- ※創作部門最優秀作品は随意部参考手本として掲載します。

かな部課題参考 (十二月二十二日締切)



(二月二十二日締切)

何こともなくて春たつあしたかな (士郎)

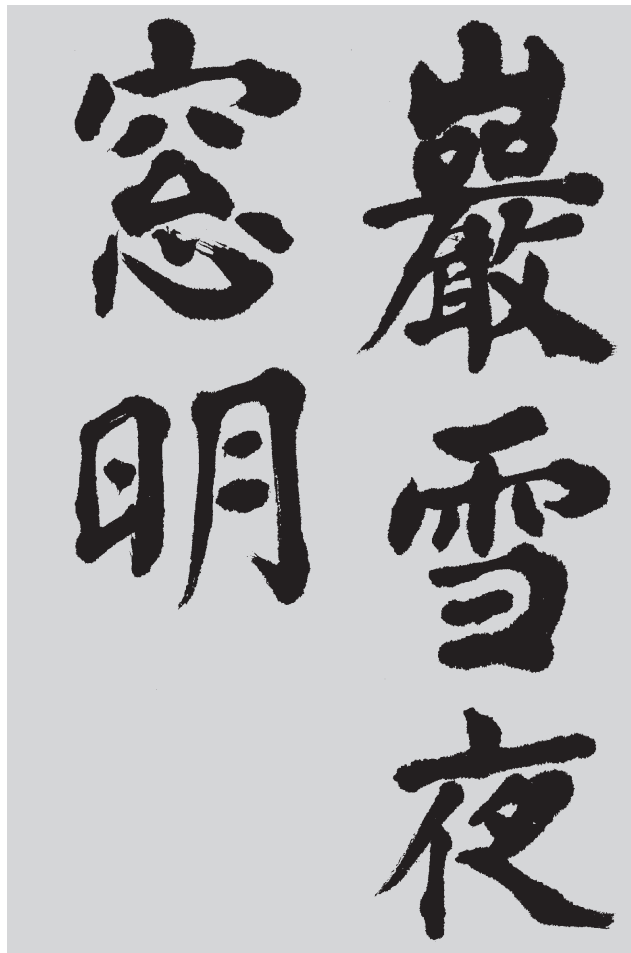
平岡華雪先生書

後より月のあがりし枯野かな (文臺城)  
う志ろより月のあかりし枯野可奈

〈細かい留意点にも〉

右群、「う志ろ」に「より」を寄せ、「月」に「の」を右へ外して、余白に変化を打ち出す。「うよ」の一画目、この点は鋒先で軽く弾く感じ。落款の添え勝負どころ。

漢字部課題参考 (十二月二十二日締切)



(二月二十二日締切)

寒風拂枯條

平岡華雪先生書

巖雪夜窓に明かなり (許渾)  
訳：山の雪が映えて窓が明るい。

〈分間の処理〉

「巖」の分間の処理は画数が多いので大いに神経をつかうが、作品の初めの字ですから、伸びやかに運筆し、分間もスッキリとさせたい。

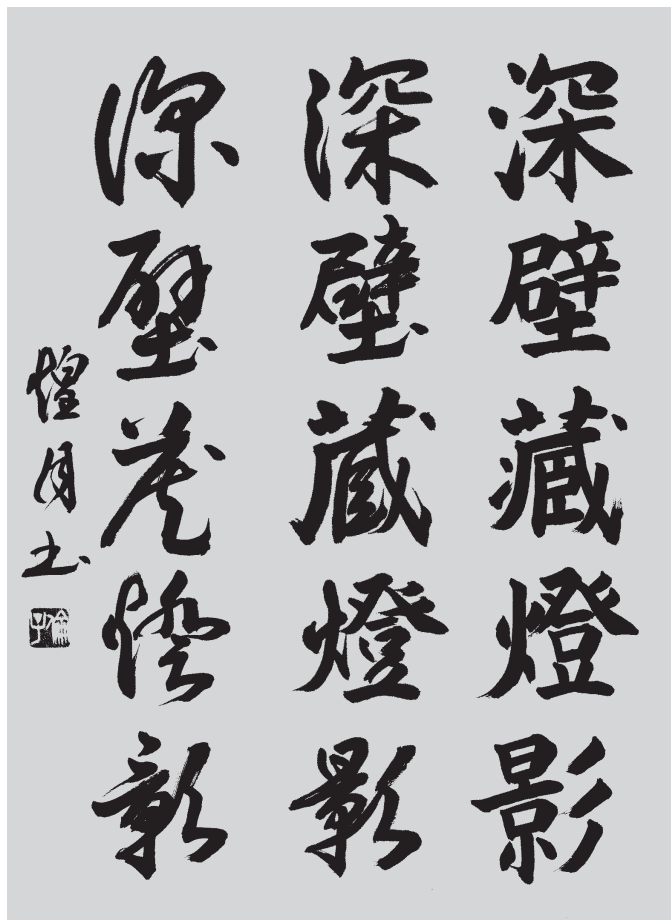
◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4cm位)に①～④を記入し、作品左隅に貼付の上、出品して下さい。一般会員は無料、会員外出品料は460円。

①出品部門(例：「漢字部」「かな部」) ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

楷、行、草、三体課題参考 (十二月二十二日締切)

漢字かな交じりの書課題参考 (十二月二十二日締切)

訳：奥深い壁に灯光がこもり



町田 煌月 先生書

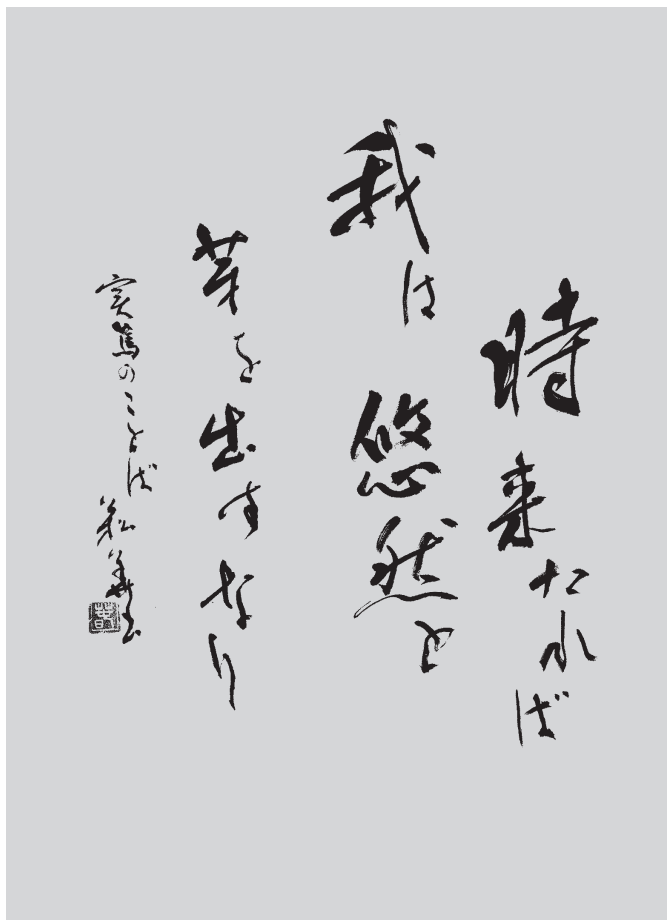
深壁藏灯影 (項斯)

深壁 灯影を藏し、

(1)随意部参考として出品してください。(2)会員外の出品料は460円。

小暮 崧華 先生書

時来れば我は悠然と芽を出すなり (武者小路実篤)

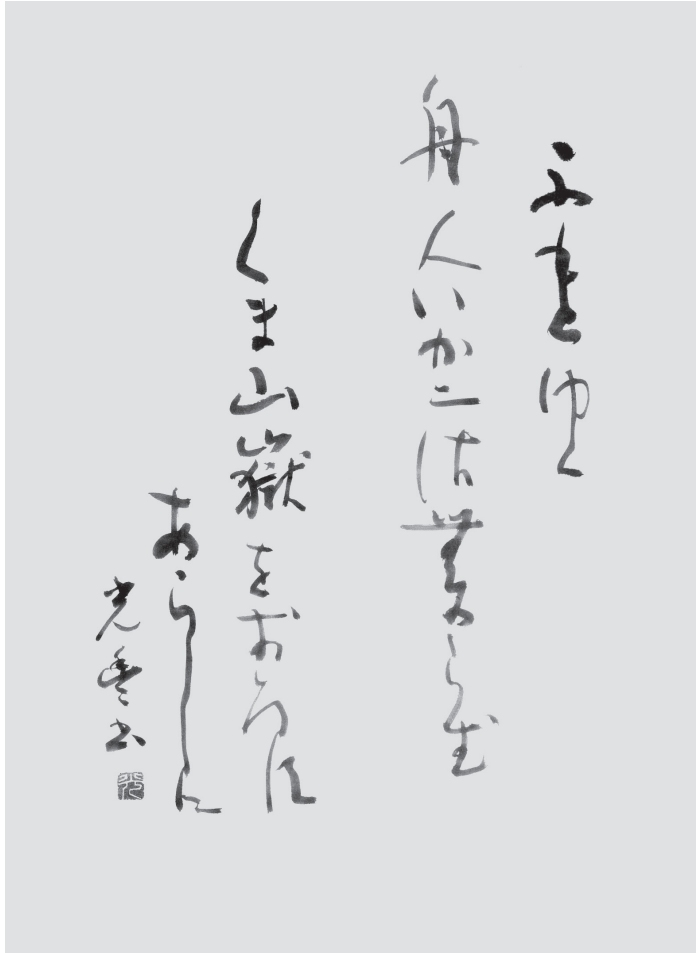


今回は、武者小路実篤の「人生詩集」の中から抜萃しました。一行目は大きく、二行目は一行目に添わせて余白のあと三行目、小さくまとめました。  
武者小路実篤(一八八五〜一九七六) 東京麹町生まれ。劇作家、詩人、画家。天衣無縫の文体で、現代に至るまで一般に親しまれています。

(1)出品料550円 (2)バーコード券余白に「漢か」と記入



随意部参考

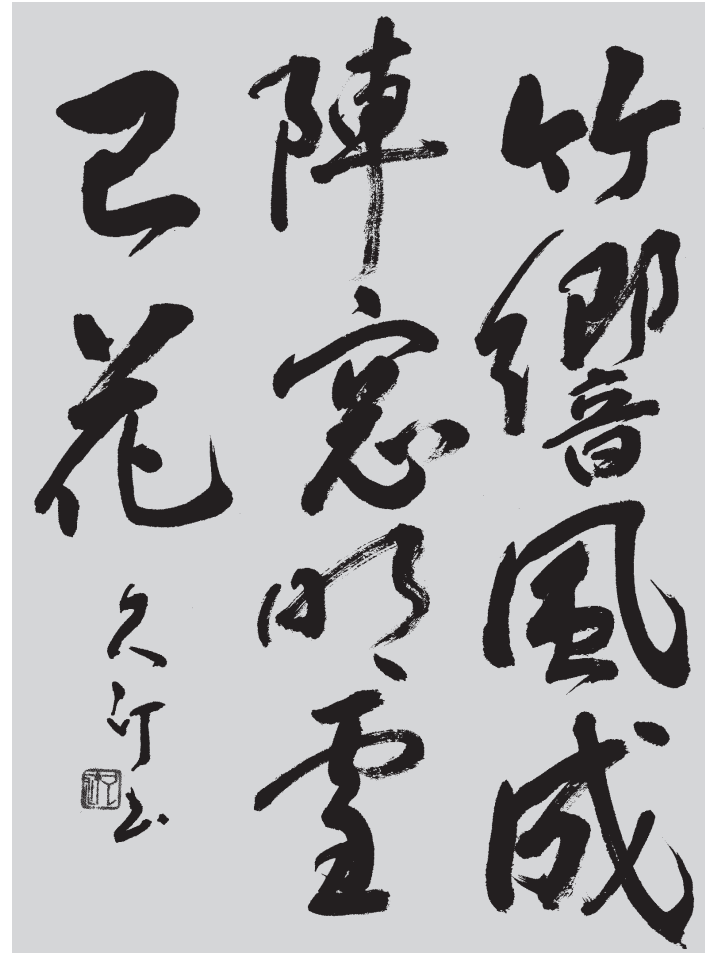


絹村光豊先生書

ふもとゆく舟人いかにさむからむくま山嶽をおろす嵐に (西行)  
 ふもとゆく舟人いかにさむからむくま山嶽をおろす嵐に (西行)  
 ふもとゆく舟人いかにさむからむくま山嶽をおろす嵐に (西行)

訳：竹は音たてて風は勢強く吹き、窓は明らかに雪は花の如くちらちら降ってきた。

随意部参考



笹崎久汀先生書

竹響風成陣 窓明雪已花 (范石湖)  
 竹響きて風陣を成し、窓明らかに雪已に花さく。

(1)随意部参考として出品してください。(2)会員外の出品料は460円。

# 硬筆部 課題参考

(十二月二十二日締切)

湯澤春翠先生書

石原春香先生書

課題 2 (初段格以下)

課題 1 (初段以上)

時に、残月、光冷やかに、白露は地に  
 滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の  
 近くを告げていた。

虎は、既に白く光を失った月を仰い  
 で二声三声咆哮したかと思うと、又、  
 元の叢に躍り入って、再びその姿を  
 見なかった。

課題 1 (初段以上)

虎は、既に白く光を失った月を仰いで二声三声咆哮したかと思うと、又、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

『山月記』中島 敦

### ◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題 2 (初段格以下)

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近くを告げていた。

『山月記』中島 敦